

退官



放射線物理学を主として担当し、
1000人余りを診療放射線技師として
世に送り出しました。

定年退官にあたって

理学部教授

小俣 三郎



1971年6月理学部に赴任以来、32年にもおよぶ歳月の経過を振り返ってみると、全体的にはそれ程長い時間が経過したとは感じられません。これは多分私の脳が次第に老化して、新しい記憶の定着能力の低下に加えて、経年的な記憶の脱落や希薄化が進んでいることが原因であり、更に個々の記憶に関する能力だけでなく、全体的な統合能力も低下していることにもよると思われます。

それにも関わらず、私の脳にプリントされている「年代記・新潟編」を通覧しますと、二つのことが見えてきます。第一は良き学生の皆さんに恵まれたことで、それぞれの時代に特徴的でそれぞれ個性的な皆さんが私を刺激し、触発し、鍛錬して、そうでなければ全く怠惰な教師で終わったであろう私に対して、絶えず問題提起をしてくれたことに深く感謝しています。第二は良き教職員の皆さんに恵まれたことで、それぞれの職種と個性に応じてご指導・ご鞭撻いただき、支えていただいたのみならず、私のような者を理解しようとして下さった多くの方々に心から御礼申し上げます。

有り難うございました。

全く怠惰な教師で終わったであろう私に対して、絶えず問題提起をしてくれたことに深く感謝しています。



新潟大学在職39年を 振り返って

医学部保健学科教授

飯田 恵一



昭和39(1964)年4月から平成15(2003)年3月まで39年間、本学でお世話になりました。最初の10年間は理学部物理学科、残りは医療技術短期大学部診療放射線技術学科と平成11年に発足した医学部保健学科を含めて29年間です。

理学部着任早々に新潟地震に見舞われました。西大畑キャンパスにあった理学部の被害はさほどではありませんでしたが、市内の被害は甚大で、何カ月も仕事にならなかったことを思い出します。

しばらくして、たこ足大学という異名をもつ本学を統合移転する話が持ち上がりました。移転先が大根やスイカ畑であった今の五十嵐キャンパスにほぼ落ち着いた頃に、折悪しく、全国に吹き荒れた大学紛争の嵐が本学にも到来。教養部校舎ができるまで大変な苦勞がありました。それが今、大改修工事が行われているのを見て感慨無量です。

その後、医療技術短期大学部に身を移し、最近創設された医学部保健学科を含めて29年間、放射線物理学を主として担当し、1000人余りを診療放射線技師として世に送り出しました。ここは学生の名前や顔は全

員覚えてしまうほど、学生と教員の距離が近く、親しみのもてる所でした。しばらくバスケット部の顧問もしましたので、他学科の学生とも親しく接する

ことができたのも楽しい思い出になります。
長い間、本当にありがとうございました。
本学のますますの発展をお祈りします。

凄い力

工学部教授
田村 久司



入社して2年目を終わろうとしていたとき、助手として大学に戻らないかという誘いを受け、それに応じて以来、41年間、本学工学部に籍を置くこととなった。その間に修士課程設置、共通一次試験、移転、改組、博士課程設置、教養部廃止などがあったが、私には移転が強く印象に残る。それは、その頃は博士論文をまとめていた時期であり、加えて教育・研究の中断なき研究室移転、家の引越し、子供達の転校などが重なっていたからであろうが、学位論文の骨子が固まっていたためかすべてがそれなりに何とか始末できたのは幸いであった。

移転作業が終わって工学部内を回ったとき、移転を計画された先生方の計画力に驚いたが、それを実行に移した事務方の力に官の力の凄さを感じた。私は昔、仙台市内から青葉山に移転した直後の東北工科大学に内地留学していたが、そのとき日本の歯車研究の礎を築かれた大先生が研究室を訪ねて来られ、「山を削り、谷に橋をかけ、立派な建物を作るというこれだけの仕事をする官の力は凄いものだ。その力は一研究室の力の及ぶところではない」と言われたことを思い出した。

いま、官の力によって、大学改革、独立法人化、JABEE、COEといろいろな施策が進められているが、各教員の教育・研究を中断することなく、本学がこれらに発展的に対処されることを期待する。

新潟大学の 発展を願って

農学部教授
内山 武夫



私は、戦後産声を上げた新潟大学農学部で、8回生として入学しました。当時は、各学部ともに古ぼけた木造の建物で、いわゆる「タコの足大学」でした。教養課程の講義は人文学部、理学部に間借りで、現在の五十嵐キャンパスを見る時、当時が夢のようです。

私は卒業後数年間、実社会でもまれ、その後母校の教員として学生諸子と共に歩んだ30有余年でした。この度、退職に当たり、とにもかくにも長い人生の中の最も大きな峠を越える事が出来たのは、恩師や諸先輩のおかげと、心から感謝するしだいです。

在職30有余年を振り返ったとき、けっして平坦ではありません。特記すべきは昭和40年代前半の「大学紛争」と「統合移転」が上げられます。「大学紛争」は右肩上がりの経済成長期の中で、大きな社会問題となりました。若く助手であった私も彼らを理解しようと、夜遅くまで話し合った事が思い起こされます。また、全教職員が真剣に紛争解決にあたりました。その結果、この紛争が農学部のその後の運営を開かれたものになっています。

創立以来55年を経て、本学の「中身」も充実し、「入れ物」も良くなった今、吹荒れている大学改革の契機は少子化と経済不況であり、現実には文部科学省による押し付けかもしれません。また、教職員にとって国立大学の法人化は多くの面で、これまで経験の無い改革です。

今また打ち寄せるこの波を、教職員の英知を集めて乗り越え、新たな新潟大学が創造されんことを願ってやみません。

移転作業が終わって工学部内を回ったとき、
移転を計画された先生方の
計画力に驚いたが、それを実行に移した
事務方の力に官の力の凄さを感じた。



「大学紛争」は右肩上がりの経済成長期の中で、
大きな社会問題となりました。
若く助手であった私も彼らを理解しようと、
夜遅くまで話し合った事が思い起こされます。